

本研究の概要

心やすき殿造りしては、かやうの人集へても、思ふさまにかしづきたまふべき人も出でものしたまはば、さる人の後見にもと思す。
(滯標巻p.299)

本研究では、まず『源氏物語』滯標巻の「かやうの人」と「思ふさまにかしづきたまふべき人」の解釈について、先行研究の意見の割れを指摘し、自身の考えとの差異を指摘した。(表参照)そして『源氏物語』中の「後見(うしろみ)」の用例分析から、作中での後見の用いられ方の特徴を明らかにすることを通して、自身の考えを論じた。

先行研究

論者名	「かやうの人」	「思ふさまにかしづきたまふべき人」
伊井春樹氏	五節	玉鬘
森一郎氏	花散里/五節	玉鬘
高橋亨氏	花散里/五節	紫の上の子
今井上氏	紫の上	明石の姫君
平沢竜介氏	五節	玉鬘
稿者	花散里/五節	明石の姫君

1章 後見について

『源氏物語』桐壺巻～幻巻の中で「後見(うしろみ)」は全部で91例。用例分析の結果、幾つの特徴を見出すことが出来た。

◆性別による後見の違い

①男性からの後見

- ・ 朝廷への後見
- ・ 婚姻による後見 夫→妻 妻が穏やかに生活をするを可能にする後ろ盾としての役割
- 妻→夫 身の周りの世話をする役割

②女性からの後見

- ・ 権力的な後ろ盾としての後見 (= **男性的後見**)
例：藤壺 / 秋好中宮
- ・ 身の回りの世話をする後見 (= **女性的後見**)
例：明石の君 / 乳母や女房

→ 後見は 後見する側の性別や身分の差によって、分類出来る。

例外：花散里

没落しているため、男性的後見には不十分と考えられる。実際に玉鬘や夕霧には女性的後見を行っている。

- ・ 玉鬘や夕霧は、藤壺に後見されていた秋好中宮のように、後見が不十分であるという記述が存在しない。
- ・ 明石の姫君は、男性的後見と女性的後見の両方が整っており、十分な後見がなされていると評価されている。

玉鬘や夕霧も花散里の後見のみで
男性的後見と女性的後見の両方を得ていると見なされている。

なぜか？

- 花散里は後見がないため、源氏からの後見を受けている。
- 読み手は彼女の元々の家柄の高さ(麗景殿の女御の妹=家柄の高さが推測可能)に加えて、後見として背後に透けて見える源氏の存在から男性的後見を感じとり、夕霧や玉鬘の後見が十分であると物語が進行することに疑問を感じないのではないか。

2章 「かやうの人」について

「かやう」という指示語

= 該当部の前に話されている**五節**と**花散里**と考えるのが自然

◎五節

- ・ 父が太宰大弼(大宰府の次官)で中流階級の女性
- ・ 源氏からの敬意表現なし

→ 男性的後見×

女性的後見○(身の周りの世話や相談役としての後見が可能)
(帚木巻に、受領階級であっても十分に費用をかけて大切に育てた娘が上達部より立派に成長する例あり)

◎花散里

- ・ 麗景殿の女御の妹=身分が高いことが推測される
- ・ 源氏からの敬意表現あり

→ 男性的後見△(源氏を背後に感じさせる)

女性的後見○(後に夕霧と玉鬘の世話を依頼されている)

3章 「出でものす」について

先行研究では、「生まれる」と解釈するものが大半

→ 『源氏物語』中で「出でものす」が使用されるのは5例

→ 「**今ないものが現れる**」といったように、「生まれる」よりも広域を示す意味で使用される言葉であることが分かる。

4章 「思ふさまにかしづきたまふべき人」について

(1)秋好中宮 → ×

- ・ 滯標巻後半部で登場するため、該当部での想定は出来ない。
- ・ 齋宮であるため、既に教養は身につけていることが予想される。
- ・ 滯標巻後半で藤壺が後見になっているため、五節や花散里を後見として考えていたとは想定されにくい。

(2)玉鬘 → ×

- ・ 玉鬘巻(8巻後)で登場するため、該当部での想定は出来ない。
- ・ 伏線として読むことは、全て読んだ上での想定にすぎないため根拠としては不十分。

(3)紫の上の子 → ×

- ・ 滯標巻で明らかにされた宿曜師の予言との間に矛盾が生じる。
- ・ 宿曜師の予言の直後に、相人の予言の確かさを実感する描写があるため源氏は予言を信じていたと読むことが出来る。

(4)明石の姫君 → ○

- ・ 父である源氏の身分は高いが、母明石の君の身分が低いため、宿曜師の予言通り后となるには後見が重要。
- ・ 少しでも早く明石の姫君を都に移したいと考えている源氏が「この程過ぐして迎へてん」と姫君を迎え入れるまでに時間を置いたのは、花散里らと共に住める二条東院の造営を完了させ、環境を整えてから明石の君親子を呼ぼうとしていると解釈出来る。

まとめ

「後見」には、男性的後見や女性的後見などの複数の種類が存在する。後見する側の身分や性別によって行方後見の種類に違いが生じている。

「後見」を再定義することにより、

「かやうの人」 = 花散里、五節

「思ふさまにかしづきたまふべき人」 = 明石の姫君

であると考えられる。

巻における該当部の意味

源氏が須磨から帰京した後に、政治的権力を持つようになりながら、
・ 自身の子どもたちをいかに育てるのか
・ これまでに関係のある女性と今後どのように関わっていくのか
という大きな変換点である**滯標巻全体の特徴を端的に表す部分**であると言える。